ハバチ類 5 種の食草¹

富 樫 一 次

石川県農業短期大学

(1972 年 9 月 4 日受領)

我が国に産する広腰亜目に属する昆虫の食草については、奥谷 (1957, '70) によりまとめられている。最近筆者はハバチ類 5 種の食草を確めることができたのでここに報告する。

1. *Leptocimbex yorofui* MARLATT ヨウロウアシブトハバチ

食草: *Acer palmatum* THUNB. var. *Matsumurae* MAKINO ヤマモミジ

本種の食草については、竹内 (1949) はカエデらしいと述べている。筆者は 1972 年 6 月 6 日、加賀白山の山麓白峰村でヤマモミジに産卵中の本種を観察することができた。産卵状況は第 1 図に示す通りである。

第 1 図 ヨウロウアシブトハバチの産卵

第 2 図 ヤマモミジ葉肉内に産みこまれたヨウロウアシブトハバチの卵

2. *Athalia rosae japonensis* ROHWER カブラハバチ

食草: *Brassica Rapa* var. *amplexicaulis* subvar. *Pe-tsai* KITAM. ハクサイ

奥谷 (1957) はダイコン・カブの 2 種を食草としてあげているが、原種はハクサイ・タカナ・タマナ・ガブ・カラシナ・ダイ

コン等を食害するという (滝沢・秋山, 1935)。

筆者は 1972 年 8 月、石川県石川郡野々市町でハクサイを食害している本亜種の幼虫を採集し、飼育・羽化 (7 ♀♀, 30—31, VIII, 1972) させた。筆者の観察にもとずけば、本亜種の 1 令と 2 令の幼虫は、葉の表皮を残してほぼ円形に葉肉を食するが、2 令末期の幼虫になれば葉に穴をうがつようになり、3 令以後の幼虫は主脈と支脈を残して葉肉を食害するため、葉は網目状を呈するようになる (第 3 図)。

第 3 図 カブラハバチの食痕 (一部)。

3. *Fenusa dohrnii* TISCHBEIN ハンノハムグリハバチ

食草: *Alnus fauriei* LÉV. ミヤマカワラハンノキ

奥谷 (1957) は本種の食草としてハンノキを記録し、かつ他のハンノキ類をも食するものであろうと述べている。筆者は 1972 年 6 月 6 日白山々麓の白峰村でミヤマカワラハンノキの葉肉内にはむぐりしていた幼虫を採集し、飼育・羽化 (3 ♀♀, 19, VI, 1972) させたものを同定した。

なお、ヤハズハンノキにはむぐりしているものも本種のように思われるが、これはまだ確認していない。

4. *Caliroa annulipes* KLUG ハクサンナメクジハバチ

食草: *Vaccinium uliginosum* LINN. クロマメノキ

熊倉が吾妻山より採集した幼虫を飼育・羽化 (2 ♀♀ 2 ♂♂, 9, VI, 1970) させた標本にもとずき同定したものである。彼の観察にもとずけば、本種の幼虫は葉裏にひそみ、葉の裏面から食害して表の表皮と葉脈とを残すため、一見葉は網目状になって見えるという。

5. *Pristiphora mollis* HARTIG

食草: *Vaccinium uliginosum* LINN. クロマメノキ

1 Food plants of five species of sawflies. By Ichiji TOGASHI (Ishikawa Agricultural College, Nonoichi-Machi, Ishikawa, 921)

日本応用動物昆虫学会誌 (応動昆) 第 16 巻 第 4 号: 217~218 (1972)

本邦末記録の種。本種も前種と同様、熊倉が吾妻山で採集した幼虫を飼育・羽化（3♀♀1♂, 11, VI, 1970）させた標本にもとずき同定されたものである。

最後に標本を恵与され、調査の機会を与えられた長谷川仁技官、熊倉正昭技師ならびに種名の確認をしていただいたフィンランドの LINDQVIST 氏に対し感謝の意を表する。また食草の種名は金沢大学理学部の 里見信生氏に同定していただいた。ここに感謝の意を表する。

引 用 文 献

奥谷禎一（1955）応動昆 9: 29～33.
奥谷禎一（1957）応動昆 11: 43～49.
奥谷禎一（1957）応動昆 11: 90～99.
奥谷禎一（1970）応動昆 14: 25～28.
竹内吉蔵（1949）関西昆報 14: 47～50.
滝沢 求・秋山武雄（1935）昆虫 9: 207～220.

Applied Entomology and Zoology Vol. 7, No. 4 の目次

藤川徳子：ササラダニ類の落葉分解に関する予備的観察	181
大竹昭郎・桜谷保之：ハスモンヨトウ成虫性比が産卵数とふ化率に及ぼす影響ならびに幼虫個体群の密度変化について	190
高橋正三・北村実彬：ワモンゴキブリの腹部分泌物の成分と機能	199
宇尾淳子・西村将司：脳ホルモンを含まない溶液の注射による除脳休眠蛹の羽化現象	207
中島敏夫：シナノナガキクイおよびヨシブエノナガキクイの孢子貯蔵器官	217
石井象二郎：チャバネゴキブリの雄による性識別	226
岡田利承：ダイズシストセンチュウの卵内に存在するふ化刺激物質	234
短 報	
Aly H. RASMY：Tetranychus cinnabarinus (Acarina：Tetranychidae) の産卵に及ぼすこみあいの影響	238
小倉信夫・斎藤哲夫：アヲヨトウ幼虫の皮ふの色素形成を支配するホルモン機構	239
Aly H. RASMY：Tetranychus cinnabarinus (Acarina：Tetranychidae) の産卵とふ化に及ぼす光度の影響	242
中園和年：ニセフクロセンチュウの発育遅延および畸形の発生	243